

マジカル・ラテンアメリカ・ツアー
妖精とワニと、移民にギャング

はじめに

突然ですが、質問です。

テキーラがなにからつくられるか知っていますか？

え、知らない？

じゃあ、コロンビアでよく聴かれている音楽の名前は？

これも難しい？ わかりました。

それでは、ボリビアがどこにあるか知ってますか？

全然わからない？ ……大丈夫、まったく問題ないです。

なぜならぼくも、昔はラテンアメリカのことをまったくにも知らなかったから。

たとえば、メキシコ料理がメチャクチャ辛いこと、ペルーやボリビアは標高が高くて生きていくのに一苦労すること、アマゾンにいる蚊が凶暴すぎることに。なにより、ラテンアメリカの国々がどんなところなのか、そこにはどんな人たちが住んでいるのか、本当に誓って、なにも知らなかった。想像すらしたことがなかった。でも、いろんな経緯があつてメキシコに住むことになり、これから書く「撮影コーディネーター」という仕事をするようになって、メキシコはもちろん、カリブ海から南米の奥地まで、「ラテンアメリカ」といわれる地域をくまなく駆け巡ることになった。そして、いろいろなことを知るようになった。ラテンアメリカの喜びや悲しみ、現実の冷酷さや人々の温かさ。

さて、撮影コーディネーターとは、一体どんな仕事なのか？ 簡単に言ってしまうと、それは「撮影に関わるすべての問題を一つずつ解決していく仕事」だろうか。

写真にしる映像にしる、海外での撮影は基本的にトラブルがつきものだ。逆に言えば、トラブルのない撮影などないとも言える。そして、そのほとんどが「当たり前」の違いから生まれるものだ。なぜかといえば、国が違えばそこに住む人が違い、文化や風習、そして言葉も違うから。当然のようには聞こえるかもしれないけど、こうした当たり前の違いから行き違いになり、そして「トラブル」は生まれる。それは、非難や言い争いだけでない、些細なことかもしれない。繊細で口に出せないようなことかもしれない。そういったことに一つずつ折り合いを付けていくのが、撮影コーディネーターという仕事なのである。

具体的には、ぼくら撮影コーディネーターのところに「写真や映像などの撮影をしたい人々」から連絡がくる。日本のテレビ局、出版社、CMなどの制作会社、映画祭事務局などなど、およそ撮影に関わりがありそうなすべての人たちから連絡がくる。そこで「今度、××の時期に〇〇の撮影をしたいんです」と伝えられる。ぼくらは、その希望にできるだけ応えられるよう、あるいは、その撮影がその人たちの想像の何倍もよくなるよう、撮影のはじまるギリギリまで粘って撮影相手などと交渉をし、撮影がはじまればギリギリまで現場で駆け回るのだ。

ちなみに、ぼくはこの撮影コーディネーターがどんな仕事なのか、誰からも聞いたこともなかったし、一から誰かから習ったこともない（ただ偉大なる先輩たちの背中はずっかり見させてもらった）。だから、日々の撮影現場で自分で考えて学んだことから「もしかしたら、こういうことも

しれない」ということをここに書いている。

この本では、そんな撮影コーディネーターのぼくが、いままでに体験してきた撮影の話を書ければと思う。たとえば、干からびた妖精のミイラ、アマゾン川の神出鬼没のピンクイルカ、ベネズエラで食べた野菜抜きトマトレタスバーガー、チリの砂漠にまたたく満点の星空、元反政府ゲリラの村で生まれた子どもたち、メキシコとアメリカの国境の壁越しに涙を流す親子の姿、移民の乗る列車に向けてケーキを投げるおばさんたち……。

撮影というのはやっぱりナマモノで、蓋を開けてみなければわからないことがある。それが海外での撮影ならなおさらだ。でもその点、ぼくはいつも自分の仕事に安心していている。いや、もつとただしい言い方をするなら、ラテンアメリカに安心させてもらっている。なぜなら、ラテンアメリカでの撮影は、いつも期待を大きく超える光景ばかりだから。

ぼくらは、「撮影」を言い訳にいろいろなところで撮影させてもらえる。いろいろな場所に行つて、様々な人の話を聞いて、そのなかでの一場面を編集して日本人たちに伝えようとする。でも、そのたった5分の映像のために、何カ月も準備をし、何百キロ、何千キロと移動をして、直接人々に会いに行く。人じゃない場合もある。連日、陽の上がる前から猫を探す仕事だった（どの番組かは、猫好きの人ならわかるはず）。

そこまで準備をして、ようやく撮影現場でカメラが回り始めると、たまに思ってもみなかったようなことが起こる。その瞬間こそが、ラテンアメリカの真髄なのだ、とぼくは個人的に思ってい

る。もちろん、日本から来たクルーも興奮している。そして、それを起こしているラテンアメリカ自身だって、めっちゃくちや興奮しているのが伝わってくる。そんな魔法にかかったような瞬間に立ち会う仕事なのだ。ぼくが見たそんなマジカルな瞬間の数々を、この本でお伝えできたらと思っている。

これからいろいろなエピソードを紹介していくのだが、それらを撮影しているとき、いつもぼくの胸はギュッと締め付けられていた。見たことのないほど美しい光景を目にしたとき、思いもかけないことでクルーと笑い合ったとき、たとえ身の危険を感じたり、誰かの悲しい瞬間に立ち会ったりしたときでも、本当に心の底から、ラテンアメリカに来て、この人たちに出会えて、本当に本当によかった、と思ってしまうのだ。そう感じるとき、いつも隣にカメラがあつて、ぼくたち（撮影はほとんどの場合が複数で行われる）は、いろんな感情を抑えながら撮影しているのだ。

なんのために？

あなたに届けるため、だ。

マジカル・ラテンアメリカ・ツアー 妖精とワニと、移民にギャング 目次

はじめに 3

【第1話】 UFO大国の妖精のミイラ (メキシコ) 013

ハイメ・マウサン／高級街にある事務所へ／「……本物です」／UF
O 大国・メキシコ／妖精のミイラ

【第2話】 アマゾン川に

沈みゆく船長 (コロンビア―ブラジル) 025

おとぎばなしのような世界／YOUはなにしにアマゾンへ？／サルのカメラマン、イルカのモグラたたき／蚊に刺されてもかゆくならない、たった1つのコツ／地獄のワニツアー

【第3話】 野菜抜きの

トマトレタスバーガー (ベネズエラ) 045

食べ慣れた食事を求めて／悪名高き国／長く険しいビザ取得の道／水を汲む人々／二分された国／非常時の日常／「ほんとうのこと」はどこにある？

【第4話】星のない東京から、

星だらけのアタカマ砂漠へ (チリ) 071

「光」の企画／星の見えない、東京の夜／光とノスタルジア／アタカマ砂漠／光の汚染／明るい街、暗い星

【第5話】2つの地震、上げられた拳 (メキシコ) 087

最初の地震／二度目の地震／地震直後の撮影／手を上げる人々

【第6話】ゲリラとお好み焼き (日本―コロンビア) 101

広島とヒロシマ／平和記念館で平和にできない人々／狂気の企画／

「終戦後」の「コロンビアにて／日本での撮影、スタート／初めての「コロンビア／真つ二つのコロンビア／元ゲリラ兵に会いに行く／これからの景色」

【第7話】
壁が分かつ人々 (メキシコ) 125

ラテンアメリカによろこそ！／ティファナ、テキーラ、セクソ、マリファナ／初めてのティファナ取材／世界最大の国境検問所／国境が分かつ女子／時代につくられた企画／予想外の集計結果／ふたたび、ティファナへ／騒然とする町並み／カモメは飛び、ぼくらはとどまる／「俺がいなくても」

【第8話】
野獣列車が運ぶ夢 (メキシコ) 155

あなたの夢はなんですか？／パトロナスの人々／移民をするということ／夢と移民と／ノートの最初に書いた名前／「他人」を助ける理由／一瞬の出会い／「ここまでしてくれる人たちはいない」／チャリで来た少年と、パトロナスの夢

【第9話】世界最悪の街、

元ギャングと移民家族

(ホンジュラス)

185

あの人、ギャングよ／「もしも」の連続／「極悪」と呼ばれた街／
マラスの跡地をたどる／更生したい元ギャング／元ギャングへのインタ
ビュー／明日、移民になる家族／恐怖と希望／言葉のない世界

【第10話】壁を越えるとき

(アメリカーメキシコ)

215

雪の降らない国から、極寒の街へ／アメリカで生きる移民たち／アメ
リカをつくる、お父さん／移民村・トナティコ／トナティコ・リベンジ／
「壁」のない場所

【最終話】
コロナ禍の

撮影コーディネーター（メキシコ）
249

父の死、そしてパンデミック／コロナ禍のメキシコ／姪っ子と「いない叔父さん」／撮影の再開／生き続ける人々、見つめ続ける人々

おわりに

268

次の立ち読み箇所に移ります

第2話

アマゾン川に沈みゆく船長

(コロンビア—ブラジル)

COLOMBIA



レティシア

BRASIL

アマゾン

おとぎばなしのような世界

窓を開けると、数千、数万の鳥たちが空から降ってきた。まるで五月雨のように。鳥たちは、高い嬌声を上げながら、雨粒が落ちてくるみたいに降りそそいだ。その光景は恐怖というよりも、まったく別の感覚をもたらしした。とても幻想的な光景だった。

ぼくらは、コロンビアのレイシヤという街にいた。アマゾンの入り口の街だ。

鳥の降る光景を見ながら、「これがアマゾン。これがラテンアメリカなのか」と呟かずにはいられなかった。アマゾンを初めて訪れたぼくたちへの洗礼。アマゾンに来た人にはこの光景を見せよう、という神の采配にすら思えた。

その日はすでにくたくたに疲れ切っていたはずだった。数週間のコロンビア各地での過酷な撮影を終えて、最後の撮影場所であるアマゾンに来たとき、撮影クルーのほぼ全員が疲労の限界に達していた。毎日、新しく撮影する異国の文化に対して、徐々にではあるが、でもたしかに、反応が鈍くなっていた。

しかし、窓から降ってくる、この数万の鳥たちを見たとき、あらためてぼくらの中でなにかのスイッチが入った。夕方に街に辿り着き、ホテルに入ったときには、すぐにでもベッドに倒れ込むぐらゐの状態だったのに、たまたま窓を開けたのが、運の尽きだった。この空から降る鳥たちの洗礼を受け、アマゾンがぼくらを異界へと招き入れようとしていた。

なにも知らないぼくらは、ただ呼ばれるように、アマゾンの深い流れへと誘われていった。そし

て、この摩訶不思議な大河を上っていくことになるのだった。

しかし、そこでなにが起こるかは、このときは知るよしもなかった。

YOUはなにしにアマゾンへ？

海外で撮影の仕事をしていると、よく思うことがある。

それは「日本人は、本当に海外への好奇心が旺盛な人々」ということである。

ぼくが小さな頃から、日本には海外を紹介するテレビ番組が多かったように思う。不思議な場所を探検したり、海外の事件現場に潜入してドキュメンタリーをつくったり、海外のおもしろい映像を紹介したり。あなたも海外に住んでみるとわかると思うのだが、こんなに海外をテーマにした番組を、ほぼ毎日、しかも各局でやっている国はそうそうない。

たとえば、ぼくの住んでいるメキシコのテレビ番組。まず目につくのは、メキシコ国内を紹介するものだ。たまに海外在住のメキシコ人のドキュメンタリーなどもやっていたりするが、それだつて、週に1回程度だ。コロナ禍の期間は、さすがに以前とは大分違っていたが（それでもあの手この手で海外の映像を流していたけど）、コロナ前の状況を思い返して欲しい。日本のテレビ番組は、ほぼ毎日どこかのチャンネルで、海外で撮影した番組を放送していたことだろう。しかも、それはニュースなどではなく、ただ純粹に海外の文化や自然、風習を、情報やバラエティー風に紹介する番組も含まれている。もちろん、テレビ番組に限らない。インターネット上では、現地ライターに

よって海外からの情報がこれでもかと発信されている。少し乱暴な言い方になるかもしれないが、たとえば、ハワイやニューヨーク、パリなど、あまりにも多く日本で取り上げられる海外の都市は、「もしかしたら日本人の方が、現地の人より詳しいのでは？」と邪推してしまうほどだ。そのぐらゐ、毎月、毎週、海外での撮影が行われている。

これが意味すること。ぼくは、日本人は「知りたがりで、海外に対する興味が強い人が多い」と思う。本当に、日本のテレビ局、ひいては日本人の好奇心には、驚かされるというか、勉強になる。そして、そのおかげでぼくらの仕事がある。そう、みなさんの好奇心のおかげで、ぼくらの仕事は成り立っているのだ。

このとき撮影した番組は、「まだあまり知られていない世界各国の秘境を紹介する」という、じつにダイープな内容の番組だった。さすが、日本人。こんな番組をやるなんて。欧米も見飽きてしまった。アジアも行き尽くした。まだ見ぬ大地は、ラテンアメリカなのだ。

自分にとっては、これがメキシコ以外のラテンアメリカでの初めての撮影となった。でも、コロンビアは少し住んでいたこともあったし、各地を旅行したこともあったので、少なからずどんな国なのかは知っていた。それでも、自分が知らなかった場所に行ってみるといのはやはりおもしろい。もちろん仕事なので、日本から来る撮影クルーよりは現地の事情を知っている。まず言葉がしゃべれるし、現地人の感覚みたいなものも、ある程度はつかんでいる。しかし、どの仕事でもそうだと思うが、初めてのことに挑戦していかない限り、仕事は更新されていかない。つまり、行った

ことがない場所だからといって、仕事を受けなければ、そこは行ったことがない場所のまま。だから、このときのコロンビアの仕事も、行ったことのある場所が半分ぐらい、初めての場所が半分ぐらいの感覚でスケジュールを組んだ。

そして、アマゾンである。アマゾン、なのである。なぜ、ただでさえ過酷な撮影の最後に、よりもよってアマゾンを持ってきたのか。できることなら、当時のぼくを小一時間ほど問い詰めた。アマゾンが最後つて。アマゾンでの撮影は、もはや体力的にキツイというよりも、その摩訶不思議な光景に精神が追いつかないだろう、と。でも、結果オーライかも。なぜなら、撮影クルーの精神が追いつかないほどおもしろい映像を、お茶の間にお届けできるからである！

撮影チームは、総勢5名だった。日本から来たディレクターが2名、カメラマン1名。そして、コーディネーターのぼくとアマゾンガイドのコロンビア人フェリペ。ディレクターのうち1名は、サブのカメラマンも務めていた。人が足りないときは、ぼくもカメラを回した。番組の目的は、至極簡単。「アマゾンでおもしろいものを撮る」、ただこれだけである。そして、目的が単純なときほど、意外と難しいのだ。

さて、冒頭のシーンである。到着初日に、ぼくらは数万羽の鳥が空から降ってくるという光景に遭遇した。これが疲れてヨレヨレになっていた、ぼくらの目を覚ますことになった。みんな、疲れてホテルの部屋にいたのだが、この光景を見て、すぐにホテルの目の前にある公園、鳥たちが降ってきた公園に向かった。

だが一足遅く、鳥たちは大量の糞だけを残し、すでに飛び去ってしまった。そして、公園には夕涼みする人々だけが残った。村人たちは、あつけらかんとした様子で、ただこう言った。

「ああ、鳥。毎日、来るからね。そう珍しいもんじゃないよ」

いやいや、相当珍しいですよ。空からあんだだけ鳥が降ってきたら……いや、待てよ。もしかしたら、この村の人たちにとっては、コンクリートだらけで鳥がカラスかハトかスズメくらいしかない日本の街の方が珍しく見えるのかな……。

夕暮れの公園には、アイス屋のチリンチリンという鈴の音と、走り回る子どもたちの声だけが響いていた。

サルのカメラマン、イルカのモグラたたき

ぼくらは、レティシアの街を数日うろうろとした後、アマゾンの奥地へと向かって出発した。アマゾンの入り口の街で、少しずつ不思議な人々に出会い、撮れ高もまずまず、体力も万全、いざアマゾン奥地へ。

移動手段は、チャーターしたボート。レティシアの河口を出発し、どんどん奥へと入っていく。川辺に浮かぶガソリンスタンドを過ぎ去り、ブラジルとの国境を通り過ぎ、北も南も東も西もわからないまま、船頭に連れて行かれるままに、ぼくらは船に乗っていた。フェリペに聞いてみる。

「これからどこに行くんだい？」

「フッフ、行ってからのお楽しみだよ」

「いや、お楽しみじゃなくて。どこ行くのかって」

「まあ、そんなに焦るなよ。行ったらわかるさ」

フェリペとの会話は、一事が万事こんな感じだった。ラテンアメリカの撮影は、あれか？ 予定をクルーに伝えたらまずい事でもあるのか？ 呪われるとか、そんな迷信でもあるのか？ 別に、焦ってるわけじゃないんだけどなあ。ただ、仕事として、次に行く場所を、撮影クルーに説明しないと。

「なんだよ、せっかちな奴だな。次に行く場所は、サルだよ。サル」

「サル？ どんな場所？」

「サルがあふれた島」

「はあ？」

疲労困憊でつい語気が荒くなってしまう。でも、サルがあふれたって、一体……。

「嘉山さん、嘉山さん。もういいですよ。大丈夫です」

半ば呆れたように、ぼくらのやり取りを見ていたディレクターが言った。ぼくは釈然としない気持ちもあつたけど、ディレクターは気づいていたのかもしれない。話を聞いても、実際に見てみるまでわからないこともある。ぼくらがその直後に目の当たりにしたのは、まさしくそんな光景だった。

到着したのは、最初はなんでもない島だった。フェリペの案内で、ぼくらは島の奥へと歩いて行く。そこで、フェリペが口笛を吹く。そして、おもむろに胸ポケットからバナナを取り出す。する

と、どこから現れたのか、大量のサルが押し寄せてきた。しかも、このサルたち、人をまったく怖がらない。別に噛んだり、ひつかいたりしてくるわけでもない。ただ、ぼくらを取り囲んで、まったく恐れることもなく頭の上などにチョココンと座ってくるのだ。カメラマンの頭に、肩に、小さな（そして、かわいらしい）サルが乗っかっている！

なんなんだ、このサルたちは。

そんなサルたちもさすがに大きなカメラには慣れていないのか、興味津々である。カメラの上に乗り出すサル、そして、ズームリングを回しはじめるサルまで出てくる。サルの手に合わせてズームイン&アウトをする画面。サルが、サルにクローズアップ。放送するなら「※この映像はサルが撮っています」とテロップを入れなければならないだろう。

あまりの光景に啞然と立ち尽くす撮影クルー一向。アマゾンって、不思議なところですよ。

サルの次は、アマゾンに生息するピンクイルカの撮影だった。

ピンクイルカ？ このドロドロの茶色のアマゾン川で？ チャイロイルカの間違いじゃないのか。なんでもアマゾンには、体がピンク色をしたイルカがいるとのことだった。それはぜひ撮影したい、ということ、ぼくらはそのイルカが現れるといわれているポイントへ。到着したのは……ただの川だった。

え？ ここですか？ さつきいた場所と、あんまり変わってる感じがしないんですけど……。

照りつける灼熱の太陽。南米の陽射しは痛い。ぼくらはいそいそとカメラを準備し、川面にカメ



ラを向ける。とはいえ、見渡す限り360度、茶色の川面。ここどこに、ピンクイルカがいるというのか？ それに、この灼熱の陽射し。こんなに暑いのに、出てくるのイルカ？ 本当に？

ぼくらは半信半疑のまま、カメラを構えていた。隣で、フェリペはぐったりしはじめている。暑さにやられているようだ。現地ガイドなんだから、君はしっかりしてくれよ！ と、心の中で呟く。

「あ！ あれ！」と、ディレクターが叫ぶ。一瞬、なにかが視界の端っこの方をよぎった。

なんだアレ……！ すると、他の場所でもニユルつとなにかが出てくる。ぴ、ぴんくいるか？ あれが、ピンクイルカ？ よくわからないけど、す、すごい！ けっこう遠いけど、たしかに見え

た。

「あ、あそこ！」

「こ、こつちも！」

ぼくらは口々に、カメラマンに向かって、目撃情報を飛ばす。その度に、高速でズームを試みるカメラマン。だが、それは、あまりに無謀な試みだった。モグラたたきは、少なくとも、目の前の穴からモグラが出てくるのがわかってるけど、こつちは360度見渡す限りの泥水から、ピンクイルカの出現を待つのだ。しかも、出現時間は一秒にも満たない。

これを撮影しろ、と？　む、む、無理とは……言わないけど。

突如、アマゾンに出現したブラック現場。これからピンクイルカを出します。この泥水の中から、一秒だけ出します。でも、どこから出るかわかりません。ぼくらはアマゾン川の真ん中で揺れていた。どこから現れるかわからないピンクイルカを待ち構えて。

「あ——！」

しびれを切らしてカメラマンから叫び声上がる。

「無理だろ、こんなの！」

すかさずフェリペが指を口に当てて、しーっとジェスチャーを示す。イルカは音に敏感なのだ。いや、静かにしたところで、撮影の難易度は変わらないだろ。つか、む、む……いや、無理とは、言わない。いつでも前向きにチャレンジ、それが撮影である。

「と、撮れた！　撮れた！」

「え、その泥色の魚が、ピンクイルカ？」

「ピンクだろ！」

「泥色じゃねーか！」

「ピンクだよ！」

突如はじまる泥対ピンクの不毛な論争。そんな泥色のピンクイルカ、放送したとしても果たしてお茶の間は喜ぶんだろうか……。

蚊に刺されてもかゆくならない、たった1つのコツ

その日の夜、ぼくらは無人島で眠ることになった。無人島と言っても、一応アマゾンのホテルらしい。見渡す限り、誰も住んでおらず、もちろん電気も水道もないのだが、アマゾンでは「五つ星のホテル」ということで紹介された。所変わればなんとやら、である。

ひとまずテーブルにつくクルー。昼間にサルがズームリングを回してから、カメラの調子がおかしいとぼやくカメラマン。うーん、サルが、ズームリングを回しただけで、メイドインジャパンのカメラが壊れるかなあ。などと、なにもない食卓で、ぼくらは与太話を交わしていた。すでに撮影の旅も終盤。これまでのコロンビアの思い出を肴に、話は途切れない。

パチン。パチン。

「なんだ、ここ。めちやくちや、蚊が多いなあ」

パチン。

「ほんつとに！」

「あ、あれ塗らないと」と言つて、ディレクターが差し出したのは、一本のチューブ。

「なんですか？　これ？」

「ああ、これはね、嘉山くん、『米軍御用達の虫除けクリーム』なんだよ」と言いながら、得意げに自分の体にクリームを塗る。

「へえ。なんか、ものすごい臭いですけど」

「そりゃ、米軍御用達だから。一説によると、このクリームは効き過ぎて塗った場所の皮膚呼吸ができなくなるらしいよ」

「え？　マジですか？　それ、やばいんじゃないですか？」

皮膚呼吸もできなけりゃ、そりゃ、蚊も刺さないよな。というか、皮膚呼吸ができないぐらいのクリームなら、ただ単に蚊の針が刺さらなくなるだけでは？　そんな疑念をよそに、アマゾンの夕陽は沈み、蚊は増えていった。

パチン。パチン。

「あれー、全然、効かないな……うわー、これ見てよ！　メチャクチャ刺されてる……やばいっしょ。これ、めっちゃやばいっしょ……」

見せられたディレクターの足は、あまりに蚊に刺されすぎて、もはや、刺された点と点がつながつて、点から線へ、線から面へとなっている始末。ぼくももちろん刺されまくっている。

「やーばいつすね、これ」

「米軍、効かないのかよー！」

米軍対アマゾン。どうやら、文明の利器は、まだまだ自然には敵わないようだ。

いやー、めっちゃ痒いよ。痒いなー。日が落ちるにつれ、どんどんと蚊の量が増してくる。いいですか、みなさん、アマゾンでは、昼間より夜の方が蚊が多いです。日本では役に立たない豆知識ですが、ぜひ、覚えていってください。

「でもさあ、それにしてもさ」と言つて、ぼくらはキッチンを見る。キッチンでは「無人島のはずなのに、どこからかやってきた女性」が忙しく働いているのだ。しかも、たき火で。ガスなどない。なぜならここはアマゾンだから。

「あの女の人さ、さつきから全然、搔いてないけど、蚊に全然刺されてないみたいじゃん。なんか、アマゾンの薬を塗ってんじゃないの？」

「たしかに！ それありそう。アマゾンに入ればアマゾンに従えですね」

「嘉山くん、ちよつと聞いてきてよ」

言われる前に、ぼくは、すでに彼女の隣に立っていた。仕事のできるコーディネーターは、言われる前に動くのである。

「すみません、仕事中に」

彼女は、はにかんだ顔でぼくを見返す。

「ご飯なら、もうちよつと……」

「いえ、ご飯じゃないんです」

彼女は、不思議そうな顔でぼくを見つめる。こういうときは、単刀直入に聞くのが吉だ。

「あの、さつきから、ぼくら蚊に刺されて刺されて、めちやくちや痒いんですよ。あなた、なにか刺されない薬とか塗ってるんですか？ なにか刺されないコツつてあるんですか？」

「刺されないコツ……」

彼女の視線がフライパンに戻る。ぼくは身構える。さあ、来るぞ。このアマゾンにおいて、先人たちから受け継がれてきた秘伝の技が、いまここで伝授されるのだ。

「コツはねえ……」と言って、彼女は、ぼくを見つめる。さあ、来い！

「……気にしないことよ」

「へ？ き、気に……しない」

「アマゾンの蚊は防げないの。だから、痒みを減らすコツはね……」

そうだ、刺されないコツがないのなら、痒くならないコツを！

「気にしないこと、なの」

「気にしない……こと……」

「わかった？ ご飯は、もう少しだから、待っててね」

フライパンの中では、世界最大級の淡水魚・ピラルクーらしき切り身が、はみ出ながら焼かれていた。そして、その隣では、バナナがこんがり揚がっている。

蚊に刺されても痒くならないコツ。母さん、ぼくらはアマゾンまで行って教えてもらいました。

それは……気にしないことです。アマゾンの深淵に触れた瞬間だった。

夕食のピラルクーは、それまで食べた魚のなかでもっとも泥臭かった。ぼくらは、それを打ち消すかのように、フェリペが大切に持ってきたカシヤーサ（ブラジルのサトウキビ酒）でつくった、脳味噌がとろけるほど甘いカクテル・カイピリーニャを片手に、アマゾン飲み干していた。つまりは、揚げバナナと蚊と、これまでの思い出話。

蚊の次は、蟻に足を噛まれはじめていた。でも、もう誰も、悲鳴を上げない。そう、ぼくらは学んだのである。気にしないこと、を。

地獄のワニツアー

夜中に、誰かがぼくの体を揺する。やめてくれよ。もう飲めないよ。酔っ払いとして百点満点の回答をたたき出しながら、うつすらと目を開ける。ここが渋谷センター街なら、新宿歌舞伎町なら、朝まで始発を待てばいい。だが、目を開ければ、そこはアマゾン。始発なんて、ないのである。

「なんだよ、どうしたんだよ」

「おい、ショータ。見に行くぞ」

フェリペが、ぼくの体を揺すりながら、笑っている。

「え？ 見に行くって、いま何時だよ？」

時刻は真夜中。真夜中、丑二つか三つである。

「この時間だから、いいんじゃないか。早く起きろ、支度しろ」

「おい、フェリペ。なんだよ、なにを見に行くんだよ」

フェリペは、ニカツと笑って、ぼくを見つめる。

「ワニだよ、ワニ」そう言ってフェリペは、他の撮影クルーを起こしに行く。その笑い顔が一番ワニっぽいんですけど、とは言えなかった。

寝ぼけ眼をこすりながら、ぼくらは小さなボートに乗った。いや、乗せられた。月夜の晩だった。こんな夜は、よくワニが見えるらしい。そ、そうかあ。

そうして、ぼくらはワニツアーに向かった。案内してくれたのは、これまたどこから現れたのかわからない、現地の人だった。たしか、ぼくらが泊まっているホテル（というか、バンガロー。というか、蚊帳がただ付いているだけの地面）は、無人島にあるはずでは？ 次から次へと人がやって来るな……もしかして、少し歩いたら、レティシアの街なんじゃなかるうか？ そんなことをぼんやりと考えながら、ボートに揺られて、真つ暗闇のアマゾン川を航行する。

ああ、月の光が綺麗だな。それにしても真つ暗だな。月の光が届かない、暗闇がそこにはあった。マングローブの林。アマゾンの川底。そこに眠る巨大魚ピラルクー。

ぼくらの泊まっているホテルは、無人島じゃない疑いも出てきたけど、少なくともボートに揺られながら、ぼくは、ああ随分と遠くまで来たな、と思った。もう誰も人がいないところに来てしまった。この広大なアマゾン川の川面に、ぼくらの乗るボートだけが浮かんでいる感じがした。まる

で映画みたいに、ぼくらは月明かりが照らすアマゾン川を夜中にひた走っていた。いまも目を閉じると、あのときの気持ちに蘇ってくる。本当に、孤独な感じだった。ぼくらだけが、アマゾン川にいて、他に誰もおらず。ただ、川底で眠る巨大魚だけが、ぼくらの声を聞いているような気がした。しばらくして、小島のような場所に辿り着いた。月明かりしかないけど、そこが砂地の島だということはよくわかった。砂上の島。大丈夫か、ここ？ 上陸したら、消えてしまうんじゃないだろうか？ ぼくはいつものとおり、用意されたもの、案内された場所を疑いの目で見はじめた。ぼくら、コーデイネーターの特性なんだと思う。「とりあえず、なんでも疑え！」が鉄則である。「誰のことも信じるな」が掟なのである。

船長兼ガイドの男性が、おずおずと錨を下ろす。船長は、腰にマチエテを構えている。マチエテとは、日本語に訳すと山刀である。山の刀。川だけど、山の刀を持っている。これに関係するスペイン語で、ぼくの好きな単語がある。それは、「マチエタソ」という言葉である。「マチエテによるドギツイ一発」という意味である。あれですね、平たく言うと、山刀で切りつけること、その行為をさした言葉。つまり、逆説的に考えると、マチエテとは、「ドギツイ一発をかますことが可能」な道具なのである。

誰に？ まさか、ワニに？ どっこい、ぼくらか？ 船長……、こんな離れ小島までぼくらを連れてきて、その腰に差したマチエテでぼくらにマチエタソ？ 一瞬脳裏に、結婚したばかりのぼくの妻の顔が浮かんだ。まさか彼女も、ぼくがいまこんな場所にいるとは思ってないだろうな。たぶん、彼女は家で猫と一緒に寝てるはず。だって、夜中だし。そんな時間に、アマゾン川の離れ小島

にワニを見に来た？」「狂ってる」と言われても、しょうがない状況だな。

ぼくは、フェリペを振り返る。フェリペ、ぼくは、まだ君への支払いを半分残している。いまここでぼくらをマチエツたら、もう支払いはできないぜ。ちなみに、鞆にも現金は入れてない。別の場所に保管してあるからな！ぼくは振り返った2秒間で、そのことをフェリペに目で伝えた。目は口よりも雄弁だ。なにかを察したフェリペが答える。

「そうだ、大切なことを伝え忘れた。これだよ、これ」と言つて、フェリペが取り出したのは、粗末なバッテリーライト。

「これがないとき、ワニは見れないんだ」

え？　まだ、ワニとか言つてんの、この人。

「このバッテリーライトで照らすとき……ワニの目がバチツと光るんだ！」

ああ、そうですか。はいはい、わかりましたよ。じゃあ、行きましようか。

ぼくらはボートを後にした。先頭は船長。その後をカメラマン、ぼく（コーディネーター）、デイレクター、最後尾にフェリペが歩いていて。覚悟はできている。なんの？　いろいろだ。

まずマチエられるとしても、カメラマンの方からか。もしそうなった場合、ぼくがそのカメラを引き継いで、撮影は続行しなければなるまい。そのためのコーディネーター兼カメラマンだ。そのことを踏まえた上での布陣だった。

船長がおもむろに、腰からマチエテを出す。くどいが、マチエテは、山刀だ。取り出された、そのマチエテは、古代遺跡からの出土品かと思うぐらい、錆びまくっていた。古代より甦った、古の

剣……でもなんでもなくて、めちや切れ味悪そう。あれで斬られたら、たぶんめつちや痛いだろうな。痛みを感じる間もなく……なんて、絶対ないな。苦しんで逝くタイプだ、あれは。

そして、船長、なにを思ったか、振りかぶって。

バサリ、バサリ。

目の前に生えている葦をなぎ倒していった。な、なるほど、そういう使い方か。ホッと一安心。

葦は、スパッと切られることはなく、悲鳴を上げながら、どんどん折られ、倒されていった。船長が、道なき場所に道をつくっていく。カメラマンは、一心不乱にその船長の姿を追う。船長は、上半身、ほぼ裸みたいな格好だった。半裸の男が、夜中に、無人島で、葦をバツサバツサ切っている。普通じゃない光景だよな。ぼくはそんなことを考えながら、カメラマンの帽子の上に、竜巻のような蚊の大群が発生しているのを見ていた。これはやばい。夜中の水辺に迷い込んだ人間たち。蚊にとっては大好物だろう。

そして、数時間前のカイピリーニヤで頭の回転を遅延させられていたぼくは、やっと思考が現実を追いついてきた。そういえば、ワニを見に来たんだっけ……。ということは、待てよ。もしかして、ワニ、すぐ近くにいてること？ え、ここ、水辺でしょ。葦が生えてるでしょ。たしかに、めちやくちやワニがいそうなロケーションだけど。ていうことは、もしかして、すぐそこにいるかもってことなのか。な、なるほど。やっとわかってきたぞ。ああ、船長の背中に、蚊の竜巻が移動してる。船長もアレかな、気にしない人、なのかなあ。いやいや違う。ワニが近くにいてもいい水辺を歩いているのって、ひよつとしてかなり危ないことなのでは……？

そして、事件は起こった。「あうー」と突然、声が出た。

こ、この声は！ 船長だ！ 船長、どうした？ も、もしかして……ワニに……。

目の前を見ると、ぬかるみにハマった船長がいた。船長は体勢を崩し、少しずつ川に沈んでいく……。月明かりが、沈みゆく船長を照らしていた。頭上には、蚊の竜巻。アマゾンが飲み込んでいく。ぼくらの撮影を飲み込んでいく。あのサルたちも、ピンクイルカも、すべての素材は消えていく。沈む船長とともに。ああ……やはり、アマゾンは、ぼくらに試練を与えたもう……。

次の瞬間、船長はゆつくりとマチエテを握りしめ直した。そして、マチエタソを地面に一発！ 船長は鼻から息を吐いて、異常に発達した上腕二頭筋を駆使して……脱出した。

彼は振り返って、バツの悪そうな顔でぼくらを眺める。

「落ちちやいました」

知ってるよ！ だって、すぐ後ろで見てたからね！ ぼくらも口には出さず笑顔で答える。

言葉は不要だ。その瞬間、ぼくらの心は1つになった。

フェリペに渡された必殺のワニライトを照らすと、泥だらけになった船長の姿が映った。ニッコリと笑う泥色の船長。アマゾンのピンクイルカと同じ色だ。

そして、船長の奥には月夜に光る複数のワニの目玉があった。蚊に襲われ、あわやアマゾンの沼地の藻屑と消えそうな人間を、横目で見ていたワニたち。人間って、不思議だな。こんなとこまでなにしに来たんだろう。そんなワニたちの声が聞こえるようだった。

生きて帰るまでが撮影です。アマゾンがぼくらに囁いていた。

マジカル・ラテンアメリカ・ツアー 妖精とワニと、移民にギャング
嘉山正太・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：2,090円（10%税込）

発売日：2022年9月26日

ISBN：978-4-7976-7417-0

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)